

Title	Thomas K. Keefeの新著によせて：中世史研究に於けるコンピューター利用
Sub Title	
Author	森岡, 敬一郎(Morioka, Keiichiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1984
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.54, No.1 (1984. 8) ,p.74, 96- 74, 96
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	余白録
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19840800-0074

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Thomas K. Keefe の新著によせて

— 中世史研究に於けるコンピューター利用 —

一般に歴史研究者は保守的で伝統墨守的であるというのが一般の通念である。また単に通念であるのではなく、事実もそうであるかも知れない。少くも、自己自身を省りみて、こうした非難をうけても仕方がないと思うことが多い。本塾の我々の友人でも、経済史では既に早く速水教授が人口動態論を歴史解釈の上に取り入れ、これに伴ってコンピューター処理を歴史研究の手段として利用され、種々の成果を挙げられているし、また、政治学で選挙を研究されている堀江教授などもコンピューターを利用されている。また史学科でも民俗、考古の方面では、多様な新しい研究手段が利用されている。しかし、伝統的な史学ではどうなのか。私自身については、新しい方法や研究手段に対して余り積極的に発言したことはなかった。

昨年、夏休みを利用して渡英し、小規模な学会に参加し、また旧師・旧友にお目にかかって旧交を温めることが出来たが、このささやかな体験で深く考える所があったので、誠につまらぬ個人的な感想に過ぎないけれども、記しておきたい。

昨年七月中旬にサセックス大学で開かれた第三十三回 Conference International Commission for the History of Representative and Parliamentary Institutions に参加することが出来た。規模は大きくはないが、極めてアットホームな感じの気持のよい学会であった。この学会のことは別にまた機会があれば述べるが、ここで言いたいのは、この Conference の第二日目に、Valerine Crowwell 女史(サセックス大学)の発表された「一八六一年—一九三六年の House of Commons の Division Lists の分析」と題する発表である。これは、この時期の

下院議員の議会に提出された法案に対する賛否と選出母体との関係を再検討して見ようとする試みの中間報告であった。これのために、各議員が、各法案の各条項毎にどのような態度をとったかを一つ一つ追跡し、また、選挙の投票毎に、当選者、落選者の夫々の得票を集め、更に、投票区毎の社会経済的性格を調査し、これらのデータを集めて、コンピューター処理したものであって、発表の際には、数枚の多色で点や記号の記入されたチャートが示されそれについての説明が行なわれた、私の英語力不足に加えて、コンピューターによるデータ処理法に対する全くの無知のために、その内容は理解出来なかった。後で伺った所では、このデータの多くは、西南部の大学のセンターにコンピューター化されているとのことである。しかし、参会者の多くが、比較的高令の学者も、活発に討論していたのには驚かされた。

その学会の終了後ケンブリッジの J. C. Holt 教授と、シェフィールドの E. King 博士にお目にかかった。イングリッド中世史に於いてコンピューターによる情報処理の中心は、周知のように、University of California の Santa Barbara 分校であり、その主宰者は C. Warren Hollister 教授である。(Albion 誌はその機関誌)。J. C. Holt 教授は、かつて「封建制度」の解釈をめぐって *Economic History Review* 誌上で論争し新しい立場(連続説)に対して伝統的な立場を強く擁護されたことは、我が国の我々年代の研究者で記憶されている方も多いであろう。要するに、両教授は謂はば論敵であり、立場を異にする二派の領袖とも言える。また King 博士にしても、Peterborough の文書をめぐって Hollister 説の批判者である。しかし、両氏とも Hollister 教授に招かれて Santa Barbara 校に出講されていた、お互に親密でさえあることが判った。これは誠に羨しいことである。更に強調したいのは、次のことである。即ち、Holt (九六ページへ続く)

教授は六〇才を超えた長老で、コンピュータ処理の効用については、可成り限定的な評価をもっておられる。(この点は King 博士も同じ)。しかし、限定された分野では十分な効用をもつことは認めておられるし、また、若い学者とこうした問題について話合える知識をもっておられる。Holt, King 両氏から Santa Barbara には、Henry II の一六六六年の封建授封関係の調査の際に各国王直屬封臣が報告した復命書を中心に、当時の封建関係の諸データがコンピュータに収録されているという伺った。

数日前、Thomas K. Keefe; *Feudal Assessments and the Political Community under Henry II and His Sons*, (University of California Press, 1983) が手許に届いた。著者の Thomas K. Keefe 博士は、Hollister 教授の門下生で、North Carolina の Appalachian State University の Assistant Professor との事である。現在まで内容の一々を紹介するだけ充分に読む時間がないので残念であるが、読んだ限りでは、上に述べた Santa Barbara 分校のデータベースを利用した成果であることは、充分窺い知ることが出来る。特に本文中にある二十六枚の図表と、Appendix I~IV の詳細な Table とはコンピュータ処理の成果である。そして、J. C. Holt 教授も、本書に対する批判としてアンジュー朝が、意図した封建的諸階級に対する搾取政策が封建的有力者によっては巧みに回避されたとする Kaefe の結論を高く評価している。これは多量のデータの利用によって可能になったのである。

要するに、コンピュータ利用か否かではなく、重要なのはコンピュータの有効な利用を歴史学の上でもっと考え、取り入れて行くべきであろう。ということである。また、このことと関連して、歴史の方法論の上でも、考えて行かなければならない点が多々ある。哲学的立場での英・米に於ける新しい方法論の紹

介はされているが、その歴史研究の実践と絡ませた上での批判的撰取が今後の課題として一層努力する必要がある点であろうし、また、社会学、人類学などの新方法論の紹介も盛んになされるべきである。更に、基本的データのコンピュータ化、など、新しい研究に対応する施設の問題も考えて行く必要がある。

また、コンピュータの歴史学会の利用の問題は相当に古い。例えば、既に一九七四年に刊行された Open University の教材にも *The Quantitative Analysis of Historical Data* (by Michael Drake) が出ている。これは、易しい入門書で、研究手続が書いてある。一般に、新しい研究手段には、種々のものがある。写真、口伝、レコードなどが、既にヨーロッパの歴史では、大巾に利用され、その方法についての入門書もある。例えば、古く一九六一年に出版された *L'Histoire et ses méthodes*, (*Encyclopédie de la Pléiade*) (sous la direction de Charles Samaran) は、その意味で、便利なものである。所謂「アナル派」ブームであるが、こうした研究入門なり、更には、その史学の基くフランス社会学の発展も、あわせて紹介されるべきである。こうすれば、松本信広、田辺寿利、古野清人といった戦前の碩学の業績との接合もはかられるであろう。

(森岡敬一郎)

(追記)

ル・ロワ・ラデュリリの『歴史家の領域』には、コンピュータの方法についての記述が相当あるが、同書の邦訳『新しい歴史』(新評論)は、一部を省略してあるので、この方面の論文が殆んどない。ジュニコの『歴史学の伝統と革新』(九州大学出版会)には、「中世史学とコンピュータ」と題する示唆に富む論文がある。